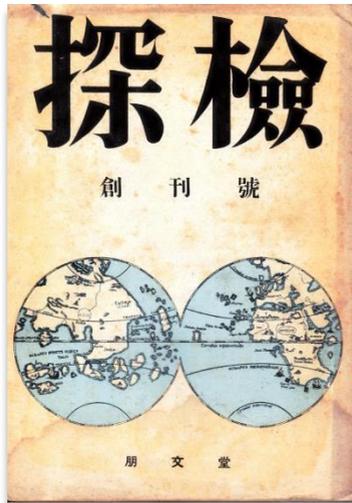




鹿沼の自然・栃木の旅

月報第33号

(2015年4・5月)



「探検の目的は自然に対する知識の獲得である。」(今西錦司)

「探検」創刊号より

詳細は6頁から

北光クラブ
自然観察クラブ 鹿沼



生涯学習と出会い
～18年目の春に想う～



花や新芽に彩られてほころびた様に見える山々を「山笑う」という言葉で表現するそうです。確かに、柔らかな春の陽ざしに、木の枝葉の新緑や山桜の薄桃色の花がきらりと風になびく姿は山々が微笑んでいるように見えます。大きく深呼吸をしたくなるそんな季節になりました。毎年繰り返される季節ですが、その時々自分の状況や気持ちの持ち方で見え方が変わります。皆様はどんな春をお迎えてしょう？

今年18年目を迎える北光クラブの活動ですが、多くの皆様に支えられてきました。自然観察クラブの阿部さんとも不思議なご縁で今日があります。お仕事でお会いした時の阿部さんはどちらかというと熱心に仕事を熟し、あまり話好きではないように思えました。でも一度自然観察に関する話を始めると止まらず、「こんな方だったんだなあ」というのが私の第一印象でした。そんな時、ちょうど他県より視察の方がお見えになることになり、体験型にしたいということで、千手山での自然観察会を開催しました。その時の阿部さんの一言がとても心に残るものでした。参加をした他県の方から「今までやっていて嬉しい時はどんな時ですか？」という質問に阿部さんは「観察会をするまで3回くらい同じところを歩いて危険な所はないか確認をします。その中で歩くとび新しく発見できることが沢山あり、(ここにこんな花が咲いていたんだなあ)とか1回目に気づかなかったことに、3回目に気づいたりするんです。これがまさに僕の生涯学習なんです」なんて素敵な響きでしょう!! いつもの阿部さんが更に輝いてみえた瞬間を私は今でも忘れることができません。

北光クラブは誰かのためにする活動ではありません。自ら学び、自ら考え行動し、そしてそれが結果として、子どもたちのためや何かのためにになっていることに喜びを感じ生きていく大人の姿を子どもたちに見てほしいと願いながら自己実現していく、まさに生涯学習です。学びに終わりはないと感じていたころの出会いでしたので、私は阿部さんが大好きになりました。そのあと奥様のみゆきさんに出会い広い知識を持ち、それでいて控えめで「こんな方が鹿沼にいらんだあ」と嬉しくなったことを覚えています。

何気なく過ごす毎日ですが、いつも誰かに支えられて生きています。子どもたちのために安全パトロールをしてくださる地域の皆様、学校の周りの草取りをしてくださる方、ゴミ収集

場所の掃除をしてくださる方、その他何気なく目にしていることすべてが当たり前ではなく奇跡なのです。そんなことを心に置き、何気ない日々の中にある出会いを大切に生きていたいと思っています。

今、社会は！ 子どもを取り巻く環境は！ 豊かになっているようで、貧困の問題などまだまだひとりひとりが感じ、考えていかなければならないことが山積しています。多くの大人が子どもに関わり、寄り添っていくことが求められています。そう言った意味でも阿部さんの活動は心を豊かにし、目の前にある様々な事を違う角度から見つめ寄り添ってられるように感じ、とても感謝しています。自然観察クラブの益々のご活躍を心より期待すると共に一緒に寄り添える大人になりたいと願っています。今後共よろしく願いいたします。

(北光クラブ代表・渡邊真知子)



☞ 本号の内容 ☜

巻頭特別寄稿	生涯学習と出会い～18年目の春に想う～ (渡邊真知子)	2
山行案内	日光・刈込湖切込湖ハイキング	4
その他の催し物	栃木県植物同好会主催 日光・湯ノ湖湖畔観察	5
次回予定	日光・太郎山ハイキング	5
表紙の本	「探検」創刊号より 今西錦司「探検の前夜」	6
活動報告・1	陣馬山ハイキング報告	14
活動報告・2	日光・鳴虫山ハイキング～日光山の歴史遺産にふれながら～	18
探訪・鹿沼の鎮守と古木④	深岩神社のイヌシデ	20
ふるさと再発見	こんなもの見つけた 庚申塔	21
愛書家のひとりごと	傷みのある本、汚れている本、書込み、蔵書印のある本。 そして、おまけ付きの古書	22
Uniqueな鹿沼の植物	カニクサ	24
山書談話室	25
会長寄稿	探検に思うこと	25
おしらせ	自然観察クラブ 2015年度会員名簿・会員消息 ほか	27

日光・刈込湖切込湖ハイキング

今年は春の訪れが早く、戦場ヶ原のズミの花も終わっていることでしょう。反面、本来夏に咲くはずの花がすでに咲き始めているかもしれません。光徳牧場に車を1台置いて、湯元から刈込湖、切込湖を訪ねてみましょう。

湯元では葉の基部の左右がずれるハルニレの巨樹、樹皮がコルク質のヒロハキハダ(調キハダとの違い)、新枝の先に穂状の花を付けるシウリザクラ(調ウワミズザクラとの違い)等が観察できます。湯元周辺はかばのき科では葉の最も大きいウダイカンバ、かえで科のオガラバナの分布域でもあります。温泉神社および温泉寺を見学してから湯の平湿原を通して登山道に入ります。国道を横切って再び登山道を登り始めると、ひのき科のクロビ(ネズコ)の巨樹が見られます。その前後には同じヒノキ科のアスナロの幼樹が見られます(調双方の違い)。ここから先は亜高山帯、ということもあり、それ以外でも針葉樹が多く、コメツガ(調ツガとの違い)、ウラジロモミ(調モミとの違い)、シラビソやオオシラビソ(調双方との違い)、トウヒ等が見られます。

刈込湖畔ではサンリンソウやあぶらな科の白い花(調)が見られ、コマドリのさえずりも聞こえるはずです(ピン、カラカラカラ)。シロバナノヘイイチゴも広範囲で、涸沼周辺ではミツバオウレンの白い花が見られるでしょう。山王峠付近では葉の先端に窪みのあるかばのき科のヤハズハンノキが多く見られます。

今回は光徳牧場まで歩いてみましょう。



日 時：6月21日(日) AM5:00 北小西門集合

行 程：鹿沼(北小) 5:10—土沢 IC—清滝 IC—コンビニ 5:50—
 中宮祠—光徳[㊦]—湯元[㊦]……温泉神社……輪王寺別院温泉寺
 ……湯の平湿原(40分)……小峠(35分)……刈込湖(30分)
 ……切込湖(30分)……涸沼(30分)……山王峠(50分)……
 光徳牧場[㊦]—湯元[㊦]—中宮祠—清滝—土沢—鹿沼(北小)

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴
持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、
ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート
必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、
参考書（栃木の山 150、栃木県の歴史散歩）、
1/25,000 地形図は「男体山」

参加費：ガソリン代 おとな 700 円、子ども 350 円
保険料 おとな 1,300 円、子ども 800 円（来年 3 月まで）
問合せ&申込み：電話 090-1884-3774（阿部）

☺ その他の催し物 ☺

栃木県植物同好会主催
日光・湯ノ湖湖畔観察

日 時：6月14日（日）宇都宮中央公園 AM7:20 集合
参加費：3,500 円（バス代・保険料）
服 装・持ち物：他の山行案内参照。
詳細&申込み：阿部まで（電話 090-1884-3774）



☺ 次回予定 ☺

日光・太郎山ハイキング

日 時：7月12日（日）AM4:00 北小西門集合
参加費：おとな 700 円、子ども 350 円



「探検」創刊号より
(昭和17年8月5日・朋文堂発行)

探検の前夜

今西錦司



『探検』が出版されるときいて私はうれしい。しかし私自身もその発行を見ずに探検に出掛けるのである。私は今までは探検というよりも遠征という言葉の方を多く用いてきた。その関係であろうか、自分から探検に出掛けるなどというと、ちょっと気はずかしさを感じる。

ヒマラヤへ行くのは遠征だろうか探検だろうか。英国人と同じコースをとって印度からチベットを迂回し、ノースコルで一息き入れてエヴェレストをねらう。そしてうまく行って世界最高峯の初登頂に成功したとしても、これが探検であるだろうか。私はやはり遠征のように思う。ところで白頭山遠征は、京都から行った私たちにこそびったりしたが、城大^{*}あたりがやる場合なら必ずしも遠征でないかも知れない。欧米人が垂細垂へ来るとすぐ探検とか発見とかいう言葉を使いたがるが、もともと垂細垂に住んでいるものから見れば、探検でも発見でもないという説の成り立つ理由も一応は考えられるであろう。

山麓の人達には毎日眺める物珍らしくもない雪の高山が、たまにやって来る登山家にとっては随喜渴仰の対象となるのだから、おかしいようなものであるが、要求心理学の立場からいえばそれでよいのである。都会人に自然が要求されるのである。この要求を満たす行為を指して、登山といったりハイキングと名付けたりする。けれどもこれほどこまでも都会人の立場に立ったものの考え方であることを否定できない。さらに今日の文化の大都会中心主義という現象を考慮に入れると、同じ目的をもった行為であっても、大都会居住者の立場が優先的、支配的となる。内地と外地あるいは植民地という場合には内地人の立場が優先的地位を占める。遠征という言葉にはこのような社会学的相対関係が含まれているものと思う。探検や発見を内容づけるものとして、近代的科学文明ということを見無視できないとすれば、探検や発見が、今まで科学文明の中心を形成していた欧米人の、欧米中心主義的な考え方に強く影響されていたことも、また已むを得ないのである。

^{*} 京城帝国大学、日本統治下のソウルにあった

(次ページへ続く)

だからここでわれわれがこの欧米中心主義的な探検概念を再検討し、これをわれわれが文化乃至は文明の上で垂細垂の嚮導者として成し遂ぐべき役割りの中に織り込み、その中からほんとうにわれわれのものとして育てあげて行けるようなものを得なければならぬという、むしろ公式的な希望的要請に対して、私はもとより異存のあろうはずはないが、具体的な問題として、然らば一体如何なる探検をなして行くべきかということになると、残念だが私も返答のしようがない。私は別段新しい探検の形式を考えているわけでもない。数年前に白頭仙をやって以来、次に解くべき課題として、形容を少し大きくすれば、寝ても覚めても忘れることの出来なかったその課題にいよいよぶつつかろうという段取りになったに過ぎない。

そこは満洲国の一部であって、前から地図も発行されており、また少数ではあるが住民も見出される。地図が出来ており人間の住んでいるところは、決して人跡未踏の地ではない。探検の対象を人跡未踏の地と解するならば、私たちに与えられた今度の計画は探検ではなくてやはり遠征といった方がよいかも知れぬ。しかし今度は何処となく探検的な気持がするというのは、恐らく踏査範囲が今までよりもずっと拡大されたからであろう。踏査範囲の拡大という意味は、勿論一義的には踏査行程の長くなったことであって、まだ私達には緯度にして三度も歩いたという経験はないのである。北アルプスは長大であるといっても御嶽から縦走をはじめて白馬の北の雪倉朝日まで行って、漸く一度ぐらいなものである。そしてこれは単なる踏査行程の比較である。北アルプスは高山には違いないが、北アルプスなら大抵の山からは平地の生活が、田圃、村落、都会、汽車、電車といったものが見える。近頃は山の中にだって山小屋が立ちならび、水電の工事などにも何処かで出くわす。しかるに今度行く処が緯度にして三度あるというのは、踏査地域の直径が三度あるということである。直径であるからして、そのまん中に立てば、どちらを向いても1度半の距離はいわゆる文明から完全に阻絶されていることになる。

それも蒙古などのように自動車で走り廻れるところだと、また趣きが異なるが、そこには低くとも山があり、また谷があって、山には密林が茂り、谷には大きな川が蛇行している。その間に少々の狩猟民族がいてもそれこそ自然に埋れて了っていて、捜さなければ見つからぬであろう。人間は耕作という過程を通して自然の相貌を一変さす。カルチベートされた自然はもはや自然ではないという強い印象を、純蒙古人地帯から

漢人地帯へ出てきたとき、われわれはきまって受けるのであるが、その蒙古人地帯としてのステップでさえも、よく見れば何百年か何千年かの放牧の結果、ある程度まで人間に馴致した自然であることがわかる。耕作地帯をもって一応人間が自然を支配している世界と見れば、ここは人間が支配的でもなく自然が支配的でもない一種の中間帯である。これに対して狩猟民族の居住する地帯こそは自然が今なお人間を支配している世界である。文明社会にとりかこまれて山の上にちょっぴりと残った自然などは、動物園の檻の中に見る動物と大して変りはないが、この自然は野獣のごとき自然である。しかもこのような自然こそわれわれにとって最も魅力の大きい自然なのではないか。このような自然が満州国の一隅に存在しているということを私は感謝せずにはおれない。そしてその自然にぶつつからずにはおれないのである。

人間はたしかに一種の社会的動物であり、社会をはなれては生活して行けないにも拘らず、その反面にあらゆる社会的なつながりから断ち切れ、社会とはあらゆる点で全く対立した自然に魅力を感じ、その中にはいり込みたいという欲望を起すのだから、仲間から切りはなされて了うと食物さえとらないで死んで了う蟻のようなものはこの辺によほど違いがある。人間は自然から出て社会を作ったが、今では社会と自然とを媒介するような立場にたって、どんなに人馴れぬ自然に対しても、この人間の立場からこれを懐柔しようとしているように見える。この点で同じ人間といっても、自然の一部分のような生活をしている未開社会の人間と文明社会の人間とで、自然に対する立場がすっかり異なっていてよいのである。

だからわれわれの自然に対する働きかけは、ただ漫然と自然の中に入りこみ、単に自然に還るというだけではやはり物足りない。自然は決して都会の延長ではないのだから、自然の中へ入ってもおびえず動ぜず悠々自適の心境をもって生活できるということが、探検家たるものの先決的な資格でなくてはならないが、それだけではまだ探検家というわけには行かない。社会は彼から探検を通じて社会への貢献を期待しているのである。そこにおのずから探検は一つの目的を持った行為とならざるを得ぬ。この目的として勿論いろいろなことが考えられるがひと口にいえば探検の目的は自然に対する知識の獲得である。だから近頃では探検といえはすぐに学術探検を連想するようになってきた。

これはまことに結構なことであるが、しかしこうなると科学者であることがまた探検家の

資格の中に数えられるのである。しかるに一流の科学者必ずしも一流の探検家でないごとく、一流の探検家必ずしも一流の科学者でない場合が少なく無い。そればかりでなく、一流の科学者がある特定の問題を解決せんがために試みる探検と、一流の探検家がやはりある問題を解決せんがために企てる探検とでは、その問題の相違に随って、実施される探検の間になんか空気の違ったもののあることをわれわれは感じてきた。たとえば北極乃至南極到達を問題とし西北航路の開拓を問題としたのは科学者アムンゼンでなくて、探検家アムンゼンであった。だからといってアムンゼンの探検に科学的な貢献がないであろうか。未踏の地域を踏破したということ自身がすでに一つの大きな体験であり、生きた地理的知識の獲得でなからうか。

その意味でエヴェレストの頂上に登ることもやはり一つの探検である。学者というものはつねに未解決の問題を解こうと努力しているのだから、その行為もやはり一種の探検であるというような解釈をし出すと、探検家と開拓者が同意義になって了う懼れがあるが、同意義でなくともこの二者の間には、精神的に何か通ずるものがあると思う。だから学術探検の神髄は、探検行為を通じて学者が自己の学問的領域を開拓する所になければならないであろう。一方からいえば、まだ充分な学問的貢献の能力のない青少年学徒に対しても、大いに探検行為を鼓吹する必要がある。探検は、嚮導者としてのわが国の将来を背負って立つべき彼等にとっては、すこぶる大切な修養となるからである。修養は修養、実生活は実生活としてどこまでも別々のものであるならば、私はもはや修養というようなことを口にしないであろう。探検をもって修養と見なす私は、やがて探検によって得られた開拓者精神が、彼等の実活の上に輝きはじめて、あえて学問的領域のみに限らず、文化のあらゆる面にわたり、創造の巨歩を踏み出さん日の来るべきを信じて疑わないのである。

探検に旅立つ前のあわただしい時間をさいて、私は自分でも何を書いたことかよくわからない。何だかもっともっと重要なことを書き忘れているように思われる。今度帰ったら書き改めねばならないのではないかという不安を、ついに追い払い得なかった。

(京都帝国大学理学部・理学博士)



この文章はその著書『山と探検』にも収録されている。

今西錦司・人物紹介と主要著書



今西錦司

1902(明治 35).1.6~1992(平成 4).6.15 生態学者、文化人類学者、登山家、と多方面で活躍した。

京都の織屋「錦屋」の生まれ。京都帝国大学農学部卒業(1928)。理学博士(京都帝国大学、1939年)。

早くから登山に親しみ、山岳の自然誌的研究を進める中で、生物社会の空間的構造に着目し、カゲロウの分布の生態学的研究から導いた〈種社会〉の概念を基盤とした、生物社会の認識論ともいべき〈棲み分けの理論〉を提唱し、これに基づき、淘汰によらない独自の進化学説を提唱した。後に、生物社会の成立の歴史的側面に関心を広げ、都井岬の半野生馬、野生ニホンザルなどの社会の研究から、人類の社会進化の研究分野を開拓し、これらの研究グループを組織するとともに、財団法人日本モンキーセンター、京都大学霊長類研究所の設立に貢献した。京都大学、岡山大学で教授職、岐阜大学では学長を歴任。京都大学・岐阜大学名誉教授。文化功労者、文化勲章受章。日本山岳会会長も務めた。

京都大学、岡山大学で教授職、岐阜大学では学長を歴任。京都大学・岐阜大学名誉教授。文化功労者、文化勲章受章。日本山岳会会長も務めた。

『山岳省察』(1940年・弘文堂) (1977年・講談社学術文庫 185) ㊦

『生物の世界』(1941年・弘文堂教養文庫 88) (1972年・講談社文庫)

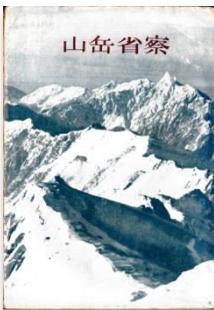
(2002年・新版中公クラシックス) ㊦—代表作

『草原行』(1947年・府中書院) ㊦

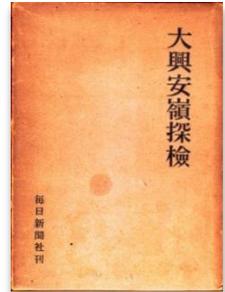
『遊牧論そのほか』(1948年・秋田屋) (1995年・平凡社ライブラリー) ㊦

『生物社会の論理』(1949年・毎日新聞社毎日選書) (1958年・陸水社)

(1994年・平凡社ライブラリー) ㊦



- 『御崎馬の社会調査』（1950年・星野書店・生理生態刊行会）㊦
- 『山と探検』（1950年・岡書院）（1970年・文藝春秋・人と思想）㊦
- 『人間以前の社会』（1951年・岩波新書71）㊦
- 『イワナとヤマメ 溪魚の生態と釣り』
（1951年・日本林業技術協会・林業解説シリーズ35）
（1996年・平凡社ライブラリー135）㊦
- 『村と人間』（1952年・新評論社・農村新書）㊦
- 『大興安嶺探検』（1952年・毎日新聞社）
- 『ヒマラヤを語る カラコラム』（1954年・白水社）㊦
- 『カラコラム 探検の記録』（1956年・文藝春秋新社）㊦
- 『ゴリラ 人間以前の社会を追って』（1960年・文藝春秋新社）
- 『人類の祖先を探る 京大アフリカ調査隊の記録』（1965年・講談社現代新書47）
- 『私の自然観』（1966年・筑摩書房）（1978年・講談社学術文庫286）㊦
- 『人間社会の形成』（1966年・NHKブックス40：日本放送出版協会）㊦
- 『日本山岳研究』（1969年・中央公論社）㊦
- 『私の進化論 私の履歴書』（1970年・思索社、新版2000年・新思索社）㊦
- 『自然と山と』（1971年・筑摩書房）㊦
- 『動物の社会』（1972年・思索社）
- 『そこに山がある』（1973年・日本経済新聞社）
（1998年・日本図書センター・人間の記録75）㊦
- 『今西錦司座談録』（1973年・河出書房新社）
- 『ニホンザルの自然社会・ゴリラ』（1975年）㊦
- 『進化とはなにか』（1976年・講談社学術文庫1）
- 『私の霊長類学』（1976年・講談社学術文庫80）
- 『ダーウィン論 土着思想からのレジスタンス』（1977年・中公新書479）㊦
- 『自然と進化・人類の周辺』（1978年・筑摩書房）㊦
- 『山の随筆』（1979年・旺文社文庫）（2002年・河出書房新社 KAWADE 山の紀行）
- 『主体性の進化論』（1980年・中公新書583）㊦
- 『自然学の提唱』（1984年・講談社）（1986年・講談社学術文庫）㊦
- 『自然学の展開』（1987年・講談社）（1990年・講談社学術文庫）㊦
- 『初登山 今西錦司初期山岳著作集』（斎藤清明編、1994年・ナカニシヤ出版）
- 『行為的直観の生態学』（中村桂子編、2002年・燈影社・京都哲学撰書19）



著書は初版発行順、㊦は全集所収、他にもたくさんの著作・論文がある

雑誌「探検」について

季刊雑誌「探検」は朋文堂より刊行された。発行年月日は次の通り。

- 創刊号 昭和 17 年 8 月 5 日
- 第二号 昭和 17 年 12 月 15 日
- 第三号 昭和 18 年 5 月 15 日
- 第四号 昭和 18 年 10 月 20 日
- 第五号 昭和 19 年 4 月 4 日
- 第六号 昭和 19 年 11 月 1 日
- 第七号 昭和 19 年 12 月 1 日

創刊号では今西錦司、泉靖一、織内信彦、加納一郎、西岡一雄、諏訪田栄蔵等、登山史に出てくる錚々たるメンバーが執筆者として名を連ね、第四号では藤木久三の名も見える。探検史上重要なのは第五号までで、以降は戦況が厳しくなり、第六号は「軍需鉱物特集」、第七号は「戦時食糧資源特集」で植物学者の本田正次も執筆している。

第二号に探検後記があり、ここで初めて編集者が加納一郎※であること、また創刊号の巻頭言「創刊の趣意」（次頁）が加納によって書かれたことがわかる。第七号の巻末にも「私記」を書いており、第五号まで編集を担当していたことがわかる。見開き、裏表紙には第五号まで、加納一郎の訳書の広告が多い。

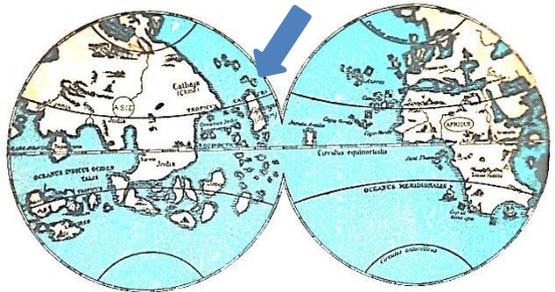
「探検」誌は第八号以降を加納の編集で発行する予定で、後記にも原稿募集の一文があったが、結局発行されなかった。

※ 加納一郎（1898-1977） 作家、翻訳家、極地研究家。大阪生まれ京都育ち、北大農学部林学科卒業。北海道庁、朝日新聞大阪本社等に勤務。戦後の林業・林学の発展に加え、日本の登山・スキー・極地探検の発展に貢献した。

表紙画の説明

コロンブスのアメリカ大陸への最初の旅の年、即ち 1492 年に、ニュルンベルクのマルティン・ベハイムによって製られた地球儀で、アジアの東方が未知であったため、ジパング（日本）は現在のカルフォルニアの位置になっている。

↑第二号奥付の解説



創刊の趣意

御稜威の輝くところ日に新に、地図を披けば誰しも「御民われ」の感懐の深きを禁じ

(次ページへ続く)

得ないこの時、ここに探検のことに關して小誌を興しうるのは洵(まこと)に幸といわねばならない。アマテラス大見戦の戦禍いよいよ高らかに、版図の展張は米英を撃碎して止まるところ無きがごとく、かくてわれらの計画書にとり込まれる辺強の域、未到の地、未詳の自然は、南に北に指呼びとまなき有様である。かつてはアンドリュースをシトロエンを、シベリアコフを、バードを、あるいはエヴェレスト登攀隊を、ニュースに聞き報文に見るにとどまった吾等は、今や彼等と全くその地位を換うる時代を迎えつつあることを知らねばならぬ。新東亜の建設は軍備はもとより政治に産業に文化に多岐多端なるはいうまでもないが、東亜の圏内に、またこれを圍繞するところ、これに隣接する地帯に、先人の足跡なお洽からず、学者の探討いまだ及ばざる原始境域の存在する以上、これに向って探検査察の行を営むことは、興亜方策の触角として、百年樹計の先鋒として正に必緊の業に属するのである。

探検のことはこれまで徒らに危険を冒し或は他愛なき名声を追い、乃至は私かに射利を計るものによってしばしば誤られたことがあるが、今日いう所の探検とは純正なる科学的探検のみを意味するものであって、換言すれば學術の各部門において未知を拓き不明を探るために敢て風餐露宿に挺身することである。従って探検の意図は自然科学あるいは文化科学におけるそれぞれの分野に発し、また得たる成果はその属するところの専門家の用に歸し、よって広く貢献さるべき順序であるが同時に野外酸楚のもとに業を行う探検それ自身の精神上技術上、特立の事項の多々存在することを認識し、これらに対する不断の研究と用意とがあつて初めて所期の目的を達することができるのである。しかるにこのことに関してこれまでわが国においては適切な機関を欠くの憾があつたことは人の知るところである。この機にあたり探検精神の理解を促進し、雄志を抱懐する同気の士の相識に資し、探検を構想し、組織し、装備し、運営し、支持するための技術と方途との研究発表の器としてここに小誌が誕生することとなった。

われらはいまだ人の登頂を見ざる世界最高の峰がアジアの中央に存在することを一日も忘れてはならないが、といつて小誌は必ずしも山の高きにのみ拘泥するものではなく、東はカナダから西はスエズに至る南北両極地の間に志をのべて、視野を広く、壯語をつつしみ、研鑽うまず、探検報国の誠をいたしたい考である。



陣馬山ハイキング報告

4月5日(日) 天気：くもり

このところ春の恒例になっている東京方面の山行、今回は早朝5時半の1番電車を出かけてJR中央線の藤野まで行き、神奈川県側から陣馬山(標高857m)に登りました。

電車の南下につれ盛りを過ぎた桜が雨にぬれる車窓風景となり天気が案じられましたが、幸い都県境の小仏トンネルの向こうは乾いていて、その後も

大した降りに遭うことなく、1日の行程を終えました。ただ、例よってのんびりの道中で時間切れ、所期の行程をかなり短縮して、後半の史跡探訪はほぼ割愛することに。

藤野でまず目を引くのは、駅南方の山の斜面の巨大なラブレターのオブジェ。芸術村など様々な地域おこしを試みている興味深い町で、駅続きの案内所でも手近な山登りのコースがいろいろあると紹介してくれましたが、我々は予定通りバスに乗って山あいの道を陣馬山登山口に向かいます。歩き始めてからも、方々の谷や山の斜面を彩るサクラを初め、春の花にいろいろ出会えました。最後の急な登りを過ぎると陣馬山山頂で、草原と露地の広場に名物の白馬の像と、少しずつ距離を置いて茶店が3軒。晴れていれば360度の素晴らしい展望のはずですが、下界は雲に覆われて遠望も利きません。雨の予報のせいか人気も少なく、広い山頂は閑散としていました。

この後景信山経由で小仏峠に下って、旧甲州街道の史跡を訪ねるはずでしたが、時間の都合で、途中の明王峠から東京側の陣馬高原下バス停へ直降、それでも夕方バスで、高尾から新宿、宇都宮と乗り継いで、夜9時過ぎの帰着となりました。



《旅の記録》

行程：鹿沼 5:32—5:47 宇都宮 5:59—6:15 自治医大 6:32—7:38 大宮 7:47—7:59 武蔵浦和 8:03—8:29 西国分寺 8:36—9:03 高尾 9:05—9:18 藤野—上沢井……(一ノ尾の尾根)……13:00 陣馬山 14:00……明王峠 15:00……陣馬高原下 17:25—高尾 18:10—18:55 新宿 19:10—20:56 宇都宮 21:00—21:13 鹿沼

費用：JR 鹿沼←→自治医大 1,160 円、休日おでかけパス 2,670 円、藤野→陣馬山登山口(バス) 180 円、陣馬高原下→高尾駅北口(バス) 560 円

✿ 参加者

佐々木伸二、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計5名）

✿ 見た植物(五十音順)

(樹の花) アブラチャン、ウグイスカグラ、キブシ、
グミの仲間、クロモジ、シキミ、モミジイチゴ、ヤブツバキ、
ヤマザクラ、

(草の花) イヌナズナ、エイザンスミレ、エンレイソウ、
カキドオシ、キランソウ、クサイチゴ、シュンラン、
タチツボスミレ、タネツケバナ、ナガバノスミレサイシン、
ニリンソウ、ネコノメソウの仲間、ヒトリシズカ、
ヒメオドリコソウ、マムシグサの仲間、ミヤマキケマン、
ムラサキケマン、ヤマルリソウ、

(常緑樹) アオキ、アラカシ、イヌツゲ、シキミ、ヒサカキ、
マンリョウ、ヤブコウジ、ヤブツバキ、

(落葉樹) アオハダ、アカシデ、イタヤカエデ、
ウラジロノキ、ウワミズザクラ、オオモミジ、カシワ、
カジカエデ、クヌギ、クリ、ケヤキ、コウヤボウキ、コナラ、
タカオモミジ、ニシキギ、ニワトコ、ホオノキ、マユミ、
ミズキ、ミズメ、ヤマコウバシ、ヤマブキ、リョウブ、

(針葉樹) アカマツ、イヌガヤ、スギ、ヒノキ、モミ、
(常緑つる植物) キツタ、スイカズラ、ツルグミ、
テイカカズラ、(落葉つる植物) フジ、ミツバアケビ、
(草) ウバユリ、キンミズヒキ、コチャルメルソウ、
ジュウニヒトエ、ノブキ

✿ 見た・聞こえた鳥

ウソ、カケス、コゲラ、ヒガラ、ヒヨドリ、メジロ、
ヤマガラ



クロモジ



エイザンスミレ



シュンラン



ニリンソウ



ネコノメソウの仲間



ヒトリシズカ

※ 参加者からいただいたおたより

陣馬山登山記

4月5日 日曜日。鹿沼駅に集合したのは阿部さん夫婦と石崎さん夫婦それからぼくの計5人。今回は東京の高尾山の後ろにある陣馬山に登った。遠出のわりには参加者が少ない。



5:32発の始発電車の宇都宮行き。宇都宮からは普通の熱海行き。今回はきっぷ入手のため自治医大で下車。続く普通列車で大宮へ。大宮から埼京線で武蔵浦和へ。武蔵浦和からは武蔵野線で西国分寺へ。さらにここから中央線の快速。高尾から普通列車で藤野へとやってきた。バスはすでに発車しており、観光案内所で情報を集めながら次のバスを待つ。

陣馬山の登山口に着くとぼつぼつ雨が降り始め、もう天気の下り坂になるのかな、と思ったらすぐにやんでしまった。ややしめったアスファルトをふみながら道を登っていくと地元の人と会った。その人から「ちょうど桜が満開だよ。」との情報をゲット。しばらく登ると4、5本の桜が花びらを散らしているところ。さらに上に行くとき小さな桜の後ろに見事なユキヤナギの並木があった。ここで登山道に分かれて林の中に入っていく。いくつかの分かれ道を過ぎて開けているところに出る。建物が見えてくると間もなく山頂に到着。お昼を食べた後、売店でおみやげの熊すずと3Dポストカードを買った。出発すると今度は明王峠へ向かう。到着するとキジバトがお出迎え。

コースタイムよりも大幅に遅れているので小仏バス停を目指す予定を変更し、次の底沢峠から陣馬高原下のバス停へ下りることに。えんえんと登山道を下り山道を下ると集落があった。そこに入ると陣馬そばの店。それを過ぎると間もなくバス停に到着。トイレもありけっこうきちんとしている。バスは数分前に発車したばかり。あと1時間近くはバスがない。おやつを食べながら待つことに。

風が吹く中待っているとやっとバスが来た。このバスには途中まで車掌がいた。折り返しの誘導と自由乗降区間のためらしい。30分以上かかって高尾駅には18時ごろに到着。ホリデー快速ビューやまなし号に乗って新宿へ。ここなら駅弁が買えるだろうと思ったらなんと工事中。店先には布がかけられ布のかかっている売店も閉まっていた。何も買えないまま宇都宮へ。ここでようやくおにぎりにありつけた。鹿沼で阿部さん石崎さんと別れ日光へ。帰りが予想以上に遅くなってしまった。

しかしこの時期としては珍しく好天に恵まれ気持ちのよい山登りができた。

(日光東中1年・佐々木伸二)

❁ 陣馬山写真集



J R中央線・藤野駅前
南方の山の斜面に
巨大なラブレターが！→



陣馬山登山口にて



道はさほど険しくはない
早春の植物観察を楽しみながら
のんびりと山道を行く



アブラチャン



山里の方々に桜が満開



尾根歩きをここで諦めて
下山することに



陣馬山頂のシンボル
大きな白馬の像



ウグイスカグラ



シロバナエンレイソウ



「陣馬高原下」バス停で
高尾駅行きのバスを待つ

日光・鳴虫山ハイキング
～日光山の歴史遺産にふれながら～
4月19日（日） 天気：くもり

世界遺産の社寺を擁する日光市は、鹿沼に少し遅れて、桜が満開の季節を迎えていました。その市街を見下ろす鳴虫山（標高 1,103m）に、花々の春の便りを期待しながら登って来ました。子どもも4人参加で久々に賑やかな山行です。

車を置いた高台の旧日光市役所は、庁舎が大正年間に建てられた和洋折衷の建築物で文化財、隣接する観音寺は整備されていますが古い石仏を豊富に蔵するお寺です。帰りにはその山門上から、日光市街の見事な眺望を楽しみました。

天気予報より少し早まり、途中から幾度か雨に遭いましたが、期待したカタクリは方々の斜面にうつむいた可憐な姿を見せ、アカヤシオも山頂周辺を満開で彩り、山道には何種類かのサクラ、足元のスミシ、と花の山旅が楽しめました。天王山、神ノ主山（このすやま）、鳴虫山、合峰、独標、と連なるピークをたどる道中は、日光市街の谷を挟んで、雪を抱いた雄大な女峰山や男体山が常にお供です。

山を降りたところにある水力発電所に隣接して、大谷川では最も美しい景観をもつ溪流、含満ガ淵が展開しています。深い青に見える豊かな水がどうどろと流れる淵の岸边には、真赤な帽子やよだれかけを身に着けた石仏群が延々と続き、異界の雰囲気漂わせています。水辺を好むチョウジザクラが小さな花を開いていました。

駐車場所に戻る途中で、同行の佐々木さん一家のお宅に暫しお邪魔しました。この辺一帯が輪王寺の塔頭で構成された街だそうで、佐々木宅も偶然にもかつて石裂山を管理していたお寺の跡とのこと。続いて輪王寺へ、宝物殿詣です。佐々木学芸員に展示物を生でわかりやすく説明していただき、家康公没後400年という時間の流れをかみしめます。巨大な外壁に描かれた建物の絵が外国人に受けているという、大修理中の三仏堂（山の上からも見えました）は、前に見た時よりどれくらい改修が進んでいるのか覗いてみたくもありませんでしたが、時間切れにて今回は見送りで。



鳴虫山山頂にて
周囲はアカヤシオで
ピンクに染まっていた

❁ 参加者

小川知峻・真司、佐々木伸二・千洋・真澄・茂・理恵、
石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき（計 11 名）

❁ 花の咲いていた植物

（落葉樹）アカヤシオ、キブシ、チョウジザクラ、
ミツマタ（下山路の谷間で野生化）、ヤマザクラ、
（草の花）ウスバサイシン、カタクリ、キクザキイチゲ、タチツボスミレ、
ネコノメソウの仲間、ヒゲネワチガイソウ



ウスバサイシン

❁ 見た・聞こえた鳥

ウグイス、カケス、センダイムシクイ、ミソサザイ、ヤマガラ

❁ 鳴虫山写真集



鳴虫山登山口



登山道から女峰山方面の眺め



進め、進め、道のりは長い



冬枯れの枝先にヤドリギ発見



アカヤシオ



チョウジザクラ



←大谷川・含満ガ淵の
清冽な流れ

その岸辺に展開する
地藏群の奇観→



探訪・鹿沼の鎮守と古木④

深岩神社のイヌシデ

深岩山東麓の道ばたに大きなイヌシデの木が立っている。胸高周囲 275cm。鹿沼市のグリーンライフ保存樹木 121 選に指定されている。すぐ南側に深岩観音の入口があるが、このイヌシデは深岩神社のすぐ前にあり、御神木として守られてきたものであろう。

イヌシデはソロノキなどともいわれ、ケヤキとともに武蔵野を代表する雑木（ざつぼく）の一つである。東京の井の頭公園の三鷹側に見事なイヌシデの林がある。鹿沼でも平地林で普通に見られるが、少しでも山地に入ると、アカシデの方が多くなっていく。平野に囲まれた茂呂山でもその多くはアカシデである。井の頭公園のイヌシデは結構な古木で、幹の様様ははっきりしないが、直径 20~30cm くらいまでの若木の幹にはアカシデ、イヌシデいずれにも美しい波形の縞模様がある。

アカシデ、イヌシデ、いくつかの違いがあるようであるが、同定のカギは若枝にある。毛が生えているのがイヌシデ、生えていないのがアカシデである。従って、この違いを知っていれば幹と若枝を見て、冬でも区別がつく。

神社の御神木はスギやケヤキ、イチヨウが多いが、イヌシデのように、昔から周りの山にあったであろう雑木が御神木として守られてきたことは本当にうれしいことである。

境内には馬魂碑が 1 基、馬力神の碑が数基立っている。これについては次の研究課題です。



深岩神社前のイヌシデと
その花→



←深岩神社の馬魂碑と
馬力神群↓
人の生活と密接に結びついた
馬の供養のため、
馬魂碑は今日でも
よく造られている



ふるさと再発見 こんなもの見つけた

庚申塔

庚申塔（こうしんとう）は、庚申塚（こうしんづか）ともいい、中国より伝来した道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔のこと。庚申講を3年18回続けた記念に建立されることが多い。塚の上に石塔を建てることから庚申塚、塔の建立に際して供養を伴ったことから庚申供養塔とも呼ばれる。

庚申講（庚申待ち）とは、人間の体内にいるという三尸（さんし）虫という虫が、庚申の日の夜寝ている間に天帝にその人間の悪事を報告しに行くこととされていることから、それを避けるためとして庚申の日の夜は夜通し眠らないで天帝や猿田彦や青面金剛を祀り、勤行をしたり宴会をしたりする風習である。



上尸

道士の姿をしている



中尸

獣の姿をしている



下尸

頭は牛、体は人の足



入粟野・日光神社
鳥居脇の庚申塔

かたち 庚申塔の石形や彫られる仏像、神像、文字などはさまざまであるが、申は干支で猿に例えられるから、「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿を彫り、村の名前や庚申講員の氏名を記したものが多い。仏教では、庚申の本尊は青面金剛とされるため、青面金剛が彫られることもある。神道では猿田彦神とされ、猿田彦神が彫られることもある。また、庚申塔には街道沿いに置かれ、塔に道標を彫り付けられたものも多い。さらに、塞神として建立されることもあり、村の境目に建立されることもあった。

分布 庚申塔は沖縄を除く全国で分布が確認されているが、地域によって建立数に差が見られる。例えば関東地方では数多く建立されているが、日本における庚申信仰の中心的な寺社がある京都や大阪など関西では比較的に見て庚申塔の建立は少ない傾向がある。確認されている現存最古の庚申塔は埼玉県にある庚申板碑で文明3

(1471)年であり、当初は板碑や石幢などが多い。青面金剛刻像は福井県にある正保4(1647)年が現存最古とされている。なお、奈良東大寺所有の木像青面金剛は鎌倉時代の作とされている。

歴史 庚申塔の建立が広く行われるようになるのは、江戸時代初期(寛永期以降)頃からである。以降、近世を通して多数の庚申塔が建てられた。当初は青面金剛や三猿像のほか、阿弥陀、地藏など主尊が定まっていない時期を経て、徐々に青面金剛像が主尊の主流となった。その後、江戸中期から後期にかけて「庚申塔」あるいは「庚申」と文字のみ彫り付ける形式が増加する。

明治時代になると、政府は庚申信仰を迷信と位置付けて街道筋に置かれたものを中心にその撤去を進めた。さらに高度経済成長期以降に行われた街道の拡張整備工事によって残存した庚申塔のほとんどが撤去や移転されることになった。

現在、残存する庚申塔の多くは寺社の境内や私有地に移転されたものや、もともと交通量の少ない街道脇に置かれていたため開発による破壊を免れたものである。田舎町へ行くと、今でも道の交差している箇所や村落の入り口などに、「庚申」と彫られた石塔を全国で見ることができる。(ウィキペディア等による)

おことわり

前号にてご紹介した千手山の歴史は、参考にした資料が江戸時代の俗説を基に作成されたもので、その後の研究の結果、学術的には別の解釈がされているようです。これについては改めて触れる機会もあるかと思っておりますので、(あまり期待しないで)お待ちしております。(阿部良司)



愛書家のひとりごと

傷みのある本、汚れている本、書込み、蔵書印のある本。

そして、おまけ付きの古書

古書は同じ著者による同じ出版社、同じ出版年月日、同じ装丁の本であっても、その本を買った持ち主による保管状況、扱い方によって状態、傷み具合は様々である。著者が喜んでくれるか悲しむかはわからないが、買った本をきれいな状態に保つためには、まずきれいな本を買い、本を開かず、紙で包んで暗くて涼しい場所にしまっておくべきであ

(次ページへ続く)

る。実際、昭和初期の本でも、この本は一度も読んでいないな、と思われる程の美本を見ることがある。しかし、古書価は必ずしも本の状態を表わしていない。古書目録を見て普通より高いから美本であろう、と考えるのは禁物である。また「美本」と書いてあるから、といて自分の持っている本より綺麗だと思ふのも御法度だ。古書は実物を見て買うに限る。しかし、わざわざ東京に出て、限りなくある古書店を訪ね、膨大な蔵書の中から自分の必要な本を探すのは困難である。古書店で探求書の在庫を聞けば済むであろうが、やはり今はどうしても古書目録に頼ってしまう。実は僕はたいてい、もともと自分の欲しい本がないのである。古書店から送られてくる古書目録を見て初めて、「こんな本があるのか」と自分の興味ある本の存在に気づくのである。

つまり、古書店の販売戦略の思うつぼにはまっているのだ。

手元にある黒川義太郎著『動物談叢』は、改造社から昭和9年3月17日の発行だ。上製本で函付。戦中戦後は別として昭和初期の本は紙質もよく、装丁もしっかりしているものが多い。本作りの技術も高く、紙質も良かったもののそれに対する対価は低かったのであろうか。1円70銭が当時として高いか安いかはわからないが。

佐藤藝古堂の目録を見て買ったこの本は本の全体が薄汚れているのはやむなしとして、函が茶色くやけ、またそのためなのか、紙がもろくなっているようで、函に本を入れた時に余る部分がボロボロになっている。

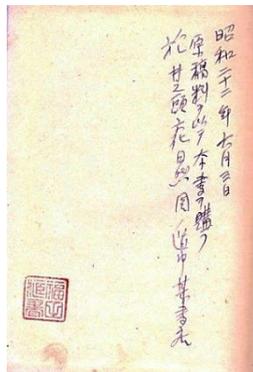
鳥海書房の古書目録に同じ本が出ている。函傷み・書込他難有、と説明書がある。それにしても、僕の持っている本よりもましであろう、とって一か八か注文してみた。結果は最悪。函のすみがボロボロになっているのは同じ。しかも背には大きな穴。押すとこわれてしまいそうだ。本の表面の薄汚れの他に白くかびたあと。さらに見返しに書込みがあり、「福田蔵書」という個人蔵印も。さらに裏見返しには書込みか何かの印を真黒い墨か何かで細長く消してある。真黒い墨で完全に消したいものといえば「何々図書館蔵書」の印であろうか。本の背の下の方にはラベルをはがした跡もある。ゴミ箱に捨てたい気持ちになるが、念のため書込みの内容を確認する(右写真参照)。

「昭和二十二年六月三日

原稿料ヲ以テ本書ヲ購ウ

於井之頭文化自然園ノ道中某書店」

この書込みをした人と「福田蔵書」の印を押した人が同じ人物かどうかはわからない。他に手がかりはないかと、頁をめくって見る。すると、葉書がはさんであった。(つづく)



Unique な鹿沼の植物

カニクサ

店のブロック塀の基部、コンクリートとの隙間にシダが生えてきた。根元にある葉を見るとたしかにシダであるが、何もすがるものがない空間につるをまっすぐに伸ばしている。つる性のシダは他にマメツタがあったな、と思って図鑑を調べると、マメツタは岩上にはびこるからつるが見えるけれど、これは根茎だそう。シダは多くのものが根茎を持っていて、所々から株立ちするものと、1枚だけの葉を所々から出すものがある。ゼンマイやコゴミ（クサソテツ）は株立ちするけれど、ワラビはただ1枚の葉を出すのみである。

このつる性のシダ、カニクサは地中からただ1枚の葉を出すタイプである。したがってこのつるの下から上まで全体で1枚の葉である。つるに見えるのは葉柄の先、普通の葉で言えば葉軸という葉の中心にある主脈に当たる。葉軸が長く伸びて2mにも達するという。1か所から1枚出る羽片は2回、羽状または掌状に分岐する。



戸張町・住宅脇のブロック塀
こ台つてりびるカニクサ↓



伊藤洋著『日本羊歯類図鑑』（厚生閣刊）より

白坂正治氏から、前号送付のお礼状をいただきました。

花散らしの雨、葉桜、若葉の前奏とふっと言葉を紡いでみたくなるこの頃です。『月報第32号』ありがとうございました。御丁寧な御挨拶いたみります。陣馬山～景信山ハイキングは趣のあるコースとりですね。“与瀬”にも歴史のノスタルジアを覚えます。「愛書家のひとりごと」文中に触れられています“山の本についての解説……”私なりに思いつく本を挙げてみました。ご参考までに。

・「日本の山の名著・総解説」(近藤信行編・自由国民社)

・(その衣がえ)「山の名著 明治・大正・昭和戦前篇」(〃・〃)

『岳人』の東京新聞からは「山書散策」(河村正之)、「山の名著30選」(福島功夫)「新・山の本おすすめ50選」(同)、昨秋創刊されたヤマケイ新書の「山の名作読み歩き」(大森久雄編)もその分野の1冊でしょう。どういう捉え方をしているのか、それぞれから示唆を受けています。GWは雲取行される由、よろしければ掲載号2部ほど頂けたら有難いです。

乱筆乱文にて。'15.4.15

あいにく雲取山行は紆余曲折を経て行き先変更となりました。報告は次号にて。それにしても東京とは言え、さすが最高峰は、容易には到達できないものだとの感想です。

会長寄稿

探検に思うこと

奥秩父の山を縦走しようとする時、また北アルプスの山に登ろうとする時、単にすでにある山道を歩くならば、それは登山であり、探検ではない。あるいは道のない谷を登って頂上をめざす時、単に山頂をきわめることを目的とするなら、それも登山であって探検ではあるまい。道のないルートをたどって頂上をめざす時、それを冒険というなら、それは正しいであろう。それは冒険的な登山であるから。

探検の目指すものは山頂ではない。探検の目的は、人の探っていない場所に分け入り、人によって解明されていない事実を、人の手にしていない知識を得ることにある。とはいえ、すでに人が入っているから探検に値しない、ということはなく、すでに人が入っていても、解明されていない事実が、また人によって知られていない知識がうもれているとするならば、それはさらに探検を重ねていく必要があるのである。

地球上、すべて探検し尽くした等と豪語するのは、それぞれ地球を知らない人であろう。

ナンセン、アムンゼン、スコット、ガラード、スウェン・ヘディン、エリック・シブトン、間宮林蔵、松浦武四郎、河口慧海、白瀬轟、数々の探検家がそれぞれの目標をもって探検に出掛けたであろう。しかしその生涯を終える時、これで目標を達成した、と考えた人が何人いるだろうか。

鹿沼の自然でさえ、程度の差こそあれ、解明されているのはほんの一部である。100m離れた場所に行けば、野生植物の種類は変わってくる。植物愛好家であれば、こんな所にこんな植物が?と思うことしばしばである。黒川流域は探検に値しないであろうか、千手山の裏山は探検に値しないであろうか。それなら大芦川源流はどうだ、横根山に切れ込む何本もの谷々はどうか、石裂山周辺は何かありそうだ。

植物の同定、すなわち植物の名前を調べる時、特に草本は花が最も重要である。しかし植物の花期、すなわち花の咲いている期間はどうかであろうか。それは植物の種類によって異なるけれど、たとえば10日間であるなら、同じ場所を1年間、2週間に1回調査を行ったとしても、種類によっては、ある時調査をして、開花寸前の植物があったとすると、次の調査の時には終花している可能性が高い。したがって、10日に1回は調査に行きたいところである。しかも生物体系は年々変化していて、地球の高熱化、シカの食害等、その変化を助長する要因は増大している。なんとか、少なくとも現在ある植物の種類だけでも記録に残したいものである。

いずれにしても見たことのない植物、昆虫、野鳥その他生き物に出合うことはうれしいことである。ヨーロッパアルプスに、コーカサスに、カラコルムに、ヒマラヤに、探検に行くのはあきらめた。それでも栃木県内にだってまだまだおもしろそうな所がありそう。鹿沼でさえ、まだ登っていない山、歩いていない地域がある。日本は世界の植物学者がうらやむほど、野生植物の種類が多い国である。毎週通えるような身近な場所に、探検に値する自然豊かなフィールドを持てるのは当然のことではなく、我々の特権である。



僕はいつも未知へのあこがれを持っていたいと思う。日本は、栃木は、鹿沼はそんなあこがれに値する地域である。

(阿部良司)

自然観察クラブ 2015年度 会員名簿

(ほぼ50音順・敬称略)

石崎隆史・裕子

白坂正治

大貫とし子

新川キミ子

小川真司・恵美・知峻・裕月

西山義信・弓子

小島美穂

山口龍治

櫻井節子

若林滋子

佐々木茂・理恵・伸二・千洋・真澄

渡辺真知子

塩入宏行・佳子

阿部良司・みゆき

会員消息

かつて観察会のたび、また奈良にご帰郷の後も原稿をお寄せいただくなど、当会の生き字引として大いに活躍いただいている山口龍治氏ですが、昨年「イチョウのあれこれ(その1)」(月報26号掲載)を寄稿いただいた後、ご病気のためしばらく入院されていたそうです。が、このたび無事退院されたとのこと。次の原稿もいただいております、次号以降に掲載予定ですので楽しみに。

その他、本号には佐々木伸二君からも原稿をお寄せいただきました。ありがとうございました。今後も皆様の投稿をお待ちしております。

自然観察クラブの皆様へ

イチョウのあれこれ(その1)を月報に投稿したのち、呑みすぎがたり、入院するはめになりました。私が奈良へ帰って来たというので、高知県出身の人と毎晩酒盛りになったのです。とにかく高知の人はハンパな強さではありません。呑みはじめたら断わるのは高知の人には大変失礼なことなのです。顔を出さなければ、むこうから焼酎をさげてやって来ます。去年の暮れに仮退院し、阿部隊長にこのことを話しました。今年にはいつ退院できたかを電話すると、隊長に、みんな心配していると聞かされました。鹿沼を離れたあとも、それほど思ってくれているのだと知り、目に熱いものを感じました。高知の人に挨拶に行くと、「おー、それは目出たいけん、退院祝いじゃかい、ちょっと待っちゃれ」と今もバリバリの高知弁で話してきて、焼酎を持ってくる。同じ病で二度とお医者さんのお世話にはなりたくありませんから、ほどほどにしています。みなさんにご心配をおかけして申し訳ありませんでした。これからいろいろなことを月報に寄せたいと思っていますので、よろしくおつきあい下さいませ。(山口龍治)

自然観察クラブ 会費納入のお願い

- ☆ 年会費（個人または家族） 1,800 円
// （会報不要または直接取りに来られる方） 600 円

※ 会報はインターネットでご覧になれます。

☆ 会費の主な用途

会報発行・発送用諸経費（郵送料、封筒・印刷用紙、インク代等）、
プリンター保守費用、臨時催事の通信、その他



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第33号

2015年5月発行

北光・自然観察クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

（クリーニングハウスあべ内）

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

